

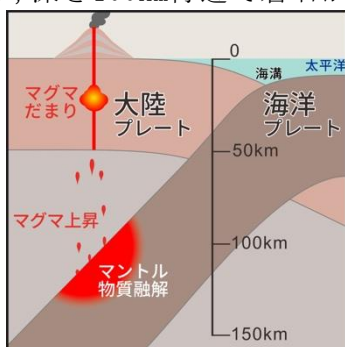
地質55・植物40 **トカラの歩き方(1)**

3月19日(土)から始まる企画展「トカラの歩き方」では、トカラ列島の自然や文化に焦点を当て、標本や写真を展示してトカラの魅力を紹介します。

**トカラ列島の成り立ち**

吐噶喇(トカラ)列島は、屋久島と奄美大島の間につながる、有人島7島と無人島5島からなる列島で、鹿児島県十島(としま)村に属しています。すべての島は火山がもとになって作られており、各島には温泉が湧き出しています。また、口之島・中之島・諏訪之瀬島は活火山であり、特に近年は、諏訪之瀬島の御岳火口が活発に噴火しています。

では、どうして火山の島がこのように列を作るのでしょうか。それには地球の表面をおおうプレートが関係しています。地球の表面は、十数枚のプレートと呼ばれる厚さ100kmほどの岩盤が組み合わさってできています。海溝(トラフ)と呼ばれる場所では、海のプレートが地下に沈み込み、深さ100km付近で岩石が溶けてマグマが生じます。そのため、海溝からほぼ同じ距離でマグマが噴出して、トカラ列島のように海溝に平行な火山の列を作ります。この火山の列を火山前線(火山フロント)と呼びます。



火山前線のでき方

ユーラシアプレートに、東からフィリピン海プレートが地下に沈み込むことにより、トカラ列島の下でマグマが作られて火山を作りました。この火山の列を北にたどると、口永良部島・薩摩硫黄島・開聞岳・桜島・霧島へとつながります。鹿児島の火山はこの火山前線に沿って分布しているのです。



活火山の連なり

地質担当 若松 斉昭, 植物担当 久保 紘史郎

**悲劇の花「タモトユリ」**

口之島だけに自生するユリ科のタモトユリは、白く美しい花が真上を向いて咲く珍しいユリです。他のユリには無い特徴を持つことから、カサブランカに代表される園芸品種作出のための交配親として高い人気がありました。



タモトユリ

ピンクカサブランカ

トカラ列島は戦後アメリカの統治下となっていました。1952年に日本に復帰し、そのころから多くの園芸業者がタモトユリを求めて、口之島に入るようになりました。当時の島民の月収が6,000円程度のころ、園芸業者が1個1,000円ほどでタモトユリの球根を買いました。島民は断崖絶壁に生えるタモトユリを、ロープを伝って採取し、業者に買い取ってもらったほどでした。このような徹底的な採集が続いたため、1980年代には島内に自生する個体はほとんど見られなくなってしまいました。1996年～2000年に掛けて、十島村が鹿児島県山岳連盟の協力で島内の断崖絶壁をくまなく調査しましたが、発見できた個体はわずか6個体だけでした。

現在、栽培されていた個体を自然状態に戻す試みが続けられています。いつの日か、以前のように、島中に咲き誇るタモトユリが見られるようになることを期待しています。



かつてタモトユリが自生していた断崖